

ポーランド・強制収容所の生還者たち 大石芳野

夜と霧をこえて



大石芳野

「夜と霧」をこえて

ポーランド・強制収容所の生還者たち

日本放送出版協会

大石芳野（おおいし・よしの）

日本大学芸術学部写真学科卒業

写真集 『パプア人—いま石器時代に生きる』『無告の民—カンボジアの証言』『少年パパニー』『隠岐の国』『沖縄に生きる』『ベトナムは、いま』『夜と霧は今』他

著 書 『愛しのニューギニア』『女の国になったカンボジア』『闘った人びと—ベトナム戦争を過ぎて』

〔夜と霧〕をこえて

ポーランド・強制収容所の生還者たち

定価——1500 円

発行日——昭和 63 年 9 月 20 日 第 1 刷発行

著者——大石芳野

© 1988 Yoshino Oishi

Printed in Japan

発行——日本放送出版協会

郵便番号 150

東京都渋谷区宇田川町 41-1

振替東京 1-49701

装幀——集合 den〔田代睦三・吉岡春美〕

印刷——壮光舎印刷/近代美術

製本——大日本製本

ISBN4-14-008612-2 C1022 ¥ 1500E

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

I 新しい病い、強制収容所症候群

治療に賭ける医師を訪ねて 7

「あの体験は地獄でした」 四〇年過ぎても得られぬ解放感

新しい病気の発見 強制収容所症候群

再訪、二〇号館伝染病棟 22

殺害のための注射 発疹チフスの人体実験

研究と治療方法 31

「私には生きる喜びがない」 「もう一人の自分」との闘い

スーヴを見る恐怖 38

いまだ他人を信用できない性格 ドイツ人の老婆を殴る

SSに殺される夢 44

子どもにも及ぶ収容所症候群の影響 ソヴアの似顔絵

子ども専用の収容所 50

ドイツ人になるための選別 ポーランド人としての誇りを捨てずに

「壊れたハートの像」 子どもの強制労働

子どもたちのうけた生体実験

II

強制収容所体験

69

理由なき虐殺と「運」のよかつた人々 69

「死の壁」 「ドイツ人を憎んではいけません」

密告による労働者の銃殺 「水晶の夜」ユダヤ人虐殺事件

人間以下 生きる希望を持ち続けて

数字は語る 95

大量殺人収容所 「浴室」と書かれたガス室

特別の囚人 108

絞首刑台の椅子 スープをめぐる事件

売春婦と遊ぶ「特別な囚人」

トランペット吹き 120

飢餓の極限状態で 収容所のオーケストラ

人体実験 126

箱いっぱい金歯 子宮に注射をされる

仲間の肖像画を描いた囚人 132

肖像画を通して広がった交流 クリスマスツリーに吊された死体

「死の行進」 No More War の像

III 収容所で結ばれた二人

148

夫妻の収容所体験談 死のカルニ・コンパニアからの脱出

「死の宣告者」という職務 出会い

アウシュビッツで生まれた子ども

IV 逃亡と抵抗

169

「死の行進」中の逃亡 169

囚人を殴れなかった労働監督 逃亡計画

献身の女性エルナ

初対面の女性に助けられて 181

「黒い道」 洋服と帽子とウォッカ

下水道管を伝わる逃亡 185

一瞬にして白髪に ドイツ人の娘と結婚

鉄格子の窓から飛びおりる 190

収容所のスキーヤー 自分の墓を自分の手で掘る

逃亡に成功

血で手紙を書く 198

三日三晩天井裏に潜んで 運動家による秘密資料の暴露

貨車から飛びおりる 206

戦争体験を語る絵 銃殺場の死体の中からの生還

生き残った者として

ワルシャワ・ゲットー蜂起の生き残り 218

ゲットーの高いレンガ塀 「どうやって死ぬか」の問題

ユダヤ人であることを隠し通す 223

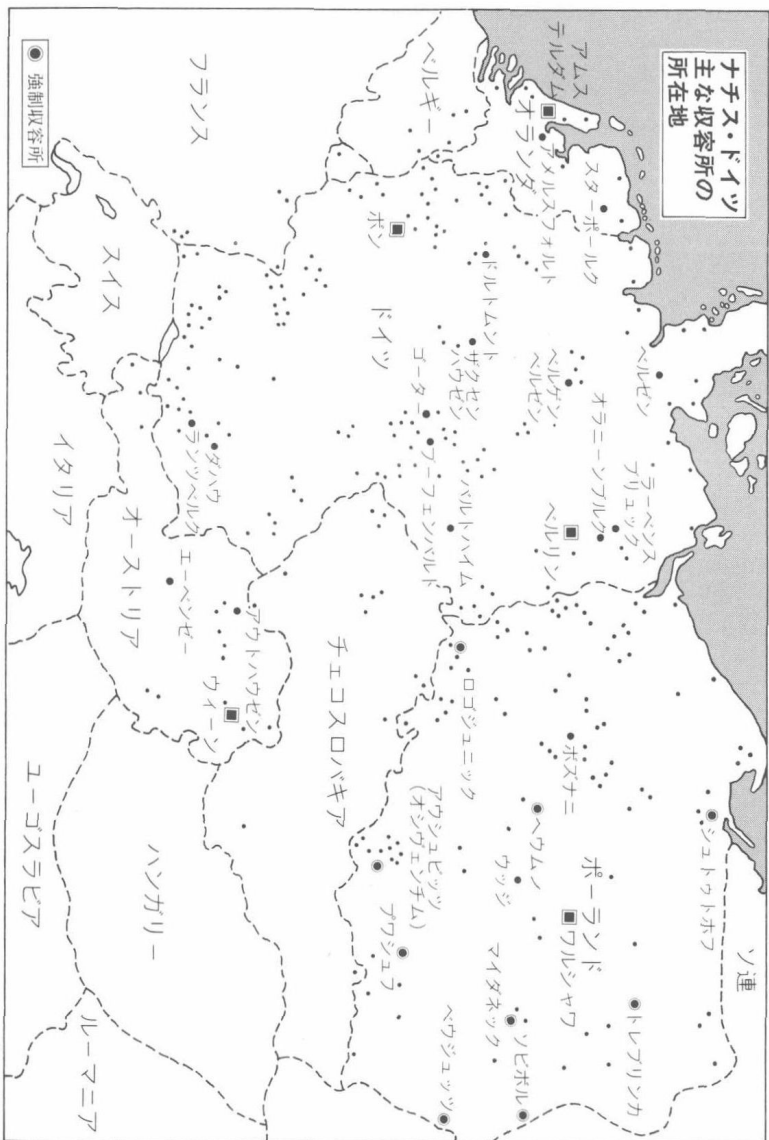
名前をポーランド名に変えて 「ユダヤ人はどのみち殺される」

廃墟の街の復元にかける 祖国ポーランドに残る意味

変革への静かな強い意志

あとがき 241

ナチス・ドイツ
主な収容所の
所在地



I 新しい病い、強制収容所症候群

治療に賭ける医師を訪ねて

「あの体験は地獄でした」

ミハウの眼差しには透明感がある。笑顔には素直な気持が現われている。その表情には人の痛みがわかるような奥ゆかしささえ漂っている。繊細な心のひだを感じさせる。

ミハウは一一歳の少年だ。この日、私は初めて彼に会った。私が訪ねていた彼の祖父クオジンスキ・スタニスワフの家に、ミハウは兄パヴェウと父と一緒にやってきた。二人の兄弟は紫色のスミレの花束をおのおのの手に持っていた。

「おじいちゃん、命名日おめでとう」

「ありがとう。よく来てくれたね」

彼らは祖父と親愛を表わすキスを交わした。スタニスワフという命名を祝って、祖父の部屋は友だちから贈られた色とりどりの花で一杯に飾られている。友だちがつくって届けてくれたという自家製のケーキにナイフを入れながらクオジンスキは尋ねた。

「紅茶にするかね。それともコーヒーかね」

二人は紅茶を注文したあと、嬉しそうにケーキを口に運んだ。

ミハウが私と最初に視線を合わせたとき、彼は頬を染めて恥ずかしそうに微笑んだ。そして首を傾け、肩をすくめてさらに笑った。

兄のパヴェウは緊張しているからか、それとも一四歳という反抗期に入っているせいかわ、比較的、陰うつな横顔である。そしてときどき、鋭いが、陰のある視線で人を盗み見るような表情をみせた。花で飾られたその部屋には大きく開けられた窓がある。昼下りの陽光が白いレースのカーテンの向う側で眩しそうだ。五月の新緑の木々がレースから透けて見える。部屋の天井は高くシャンデリア式の、しかし地味なデザインの電灯が中央にあり、外の白い光と黄色い電灯の光が妙なハーモニーをかもして出している。アイボリー色の壁は広く、茶色い古典的な感じのする戸棚などが置かれた上の空間もたつぷりだ。

壁面には画廊のようにたくさん肖像画が飾られている。絵は一枚一枚、私に微笑んでいるようにも思う。けれど、あまりにも大勢の絵に現われた人びとに見つめられ、緊張する思いさえあった。

「ここにある絵は、皆私の家族です」

と、私の側に立ったクオジンスキはいった。

「この絵は母で、これは息子、そして私の少年時代、こちらのルノアール調の絵は幼ない時に亡くなった妹、向うの壁は祖父と祖母、そしてこれは亡くなった妻で……」

一二枚の絵の一人一人を彼は私に紹介してくれた。

「この部屋にいと、家族に囲まれているような気持ちになるのです」

彼は大きな鼻に納まった黒縁のめがねの縁に軽く指先で触れながらいった。

クオジンスキ・スタニスワフは医師だ。花を贈ってくれた友だちの中には、同時に患者である人もいる。その一人、初老の婦人が黒っぽい洒落たワンピース姿でお祝いをいいに来ていた。彼女の夫は心臓と高血圧で長いこと患っていたが、一年前に亡くなった。夫は最後までクオジンスキ医師を心の頼りにしていたという。赤いリボンで飾った花束を渡したあと、彼女はこういった。

「私も最近体調が悪くて、料理も昔のように作れなくなりましたの。私の命名日には花までもらったのに、お客さんを招きませんでした。何も作る気がしなかったし、作っても自信がありませんでした。お金も無駄にしたくなかったのです。いまおいしく頂けるのは牛乳とコーヒー、それにタバコだけです。毎日のように、墓地へ行って三時間くらい過してるといった生活です。でもいつまでもこんな風になっているわけにはいきません……」

婦人は夫を亡くして以来、心身の病いにかかっていることを医師に訴えていた。

彼女ばかりでなく訪れた患者や友人たちにクオジンスキ医師は丁寧に対応していた。愚痴も自慢話もみな引き受けているといった感じだった。

画廊のような部屋の隣りが診察室になっている。そこを訪ねていたある日のこと、六六歳になる女性の患者がやってきた。

夜は寝つけず、昨晩は一睡もできなくて調子が悪い、と訴えていた。医師は診察した後、「血圧が一八〇で不整脈がでている。イライラしたようだね」といいながら、血圧を調整する薬を渡しビタミン剤と肝臓薬の処方せんを書いた。

「サナトリウムで静養できるといい。散歩したり、時には森をさ迷うのもいいでしょう。気持を楽にすることがあなたの場合には何よりも大切なのです。あなたの病気はもう、完全に治ることはない

でしょう。いま必要なことは、安静にして刺激を避け、なるべくこまめに専門医に診てもらうことです」

彼女の不治の病とは何なのだろうか。私は耳を傾けながら二人の表情をじっとみつめていた。クオジンスキ医師は、少し間をおいてこういった。

「以前にもいったように、あなたの病気は強制収容所症候群なのです。全部、収容所でもらってきた病気です。あなたが収容所に入れられたときにかかり始め、その後、ますます重くなった。そして、四〇年以上たつたいまでも治らない病気が、強制収容所症候群なのです」

そつと彼女の方へ視線を動かすと、彼女ははつきりした口調でこういった。

「ええ、先生。いまでも辛いのは一人ぼっちということです。家族も親類もいないのですから……。腹痛や頭痛より、もっと辛いんです」

顔色もすぐれず太り方も不健康そうなその女性は、顔を歪め、暗い表情だ。

「結婚もしなかったんです。長い間、ずつと精神的に不安定でしたから」

小柄だが胸は大きく、V衿のびつたりとした白いセーターが、彼女の女らしい体形をみせていた。彼女はツェルタ・ヘレナといいタルノフに住んでいた。そこはかつてはポーランド領だったが、戦後ソ連領に組み込まれた地域の一つだ。彼女の父親は皮製の洋服を作る職人で五人家族だった。戦争が勃発して、ナチスのゲシュタポ（ドイツ秘密警察）に家族も親類も捕えられた。ユダヤ人居住地のゲットーに入れられた。そこからアウシュビッツ強制収容所に送られ、彼女を除いた家族の全員が殺された。

「私一人、ここまで生きてきましたが、淋しさと病気との闘いの歳月でした。戦後まで生き残れた

人もつぎつぎと亡くなり、本当に孤独です。年をとると、何もかもが面倒になって、よけいに気がめいてしまふんです」

強制収容所やゲットーでは大半の人びとが命を奪われた。生き残れた人たちでさえ、体は極度に衰弱し、精神的な過労は回復されないうまま、戦後の廃墟と化した故郷に放り出された。ドイツ軍による被害はあまりにも大きく復興にはひどく時間がかかった。住宅、食糧、衛生など戦後の生活環境は極端に悪く、囚人だった人ばかりが特別の保護を受けられるゆとりがなかったようだ。

だれもが心身が受けた苦難をいやす暇はなく、過労が残ったまま時を過ごしていった。その間に、せつかく生き残ったにもかかわらず、病気の治療も、栄養補給も得られなかったため、大勢の人びとが戦後、五、六年の間に亡くなった。

四〇年以上過ぎた現在でも、収容所での苛酷な体験を経た囚人だった人の死亡率は、そうでなかった人に比べて数倍も高い。そして今日まで、生き残れた人たちは全囚人のほんの数パーセントにしかならない。彼らはあたかも頑健に生き抜いてきたようにも見られがちだ。けれどさまざまな後遺症に悩まされ続けてきた。健康はすぐれず、夢にうなされるなどといった私たちにはそら恐ろしいことでも、彼らにはごく日常的なことである。

ツエルタもその一人だ。

「夜中に逃げる夢を見て、大声をあげて目を覚ますと、全身が汗でびっしょりになっています。あの体験は地獄でした。あなたには想像もつかないでしょうが、地獄だったのですよ」

といってしばらく沈黙したあと、彼女は医師からの投薬を赤いハンドバッグにしまい、その中から十字架のネックレスを出して首にかけた。診察のためあらかじめはずしておいたものだろう。V字形

の胸元が銀色の十字架で飾られた。

「ええ。あの当時は本当にひどいものでした。あなたは若いからお分かりにならないかもしれませんが
んけれど……」

私は心の中で深くうなずいた。確かに、私がどれほど努力しても彼らが受けたその苛酷さを分かることはあり得ないだろうと。

何の体験もない私に、では、どうしたら彼らのひどさが分かるのだろうか。何の方法もない。ただわずかな手立てとして、想像力を働かせることしかないだろう。私の能力が許すかぎりの想像力をもつことで、彼らにいくらかでも近づけるかもしれない。彼女の「逃げる夢」を言葉だけで受け取れば、だれでも多かれ少なかれ見たことのあるものだろう。が、人びとが置かれた当時の状況を知るにつれて、気楽ではいられなくなる。

そして想像力を働かせることで、やがては彼ら一人一人と連帯できるところまで近づけることができたらいいと願うばかりだ。

四〇年過ぎても得られぬ解放感

クオジンスキ医師は古都クラコフの市街地にあるアパートに診療室を兼ねた住いをもっている。

クラコフはちょうど京都のような情感がある。戦災に遭わなかったため歴史的な建物が多い。中でも旧市街のマリア教会を始めカトリック教会は至る所にあり、クラコフの僧侶にも何百あるのかその数はわからないというほどだ。ポーランド人の信心深さは全国的で、クラコフばかりかどの町にも村にも、教会は多い。ローマ法王ヨハネ・パウロ二世はこうしたポーランドの人びとに育まれる中

で誕生したのだらうと感じられた。

クオジンスキ医師もまぎれもなくカトリック教徒だ。けれどそのことをほとんど現わさないようにしている。それは神の力ではどうにもならない、あまりにも大勢の人びとの苦しさを見てきたからだ。ろう。同時に彼自身もその地獄をくぐらされた一人だったからだ。

初めてクオジンスキ医師を訪ねたのは、その冬の雪の降る寒い日だった。よく暖房のきいている診療所の部屋に通された。

彼は窓を背中にして、大きな机に向けてあつた椅子を少しずらしながら、私を窓に向いた椅子に坐るようすすめた。窓にはやはり白いレースのカーテンがかけてあり、雪が見え隠れするように降っているのがわずかに見えた。

「すべての囚人がそうだと思いますが、いまだに完全な解放感はない。収容所の恐怖感を引きずりながら、現在の生活と比較して考えてしまう。そのあまりにも違うギャップに苦しい気持ちになる。収容所で受けた苦しみによる障害者ということです。いつも何かに脅えたりこだわったり。自らの内側と外側の葛藤に悩んでいる」

クオジンスキ医師から初めてその話を聞いたとき、私は全身に鳥肌の立つ寒気を覚えた。

これまでに会った大勢の囚人だった人たちが、完治しない病気に冒されているままだということもショックだった。一人一人の顔がつぎつぎと浮んだ。彼らの中には、いかにも当時から一步も脱け出せないような人もいたが、高らかに笑い、冗談をいい、趣味の話題が豊富な人たちもいた。けれど、皆いちように暗い。体全身から陰を感じたことも確かだ。同時に、そうした陰を隠そうとしているようにも見えた。

彼らは私にいい方は違っても次のようにいったことを思い出した。

「普通の人のようになろうと、生活し仕事を続けてきた。が、いつも囚人だった時のことが頭にあり、いまだに抜け切れない。当時の悪夢にうなされる夜もある」

診察室の窓から入る弱い光線が眩しいほど室内は暗く感じた。もっとも彼が窓を背にして首を前に突き出し、俯向きかげんにしている姿勢のせいかもしれない。逆光の中でクオジンスキ医師の顔は見えにくく、時折り彼の顔は影の中に埋もれたように見えた。両肘を掛けて胸元で組み合わせた手に、顎をのせながら静かに話した。明確な言葉の調子に、強い感情をこめながら、しかし冷静なほど淡々とゆつくりした話し方は、私をよけいに緊張させた。

いまだに解放感がないということに私は恐怖に近いものを感じた。人間が人間になしえる最悪の虐待であり、まさに人間の尊厳とは何かを考えさせることである。

それだけにクオジンスキ医師たちが戦後、研究し続けてきたことがどれほど重要なことがわかる。多忙な日程の中で少しずつ時間をさいてもらい、クラコフにいる間に、私は何日か彼のアパートにある診察室を訪れては話を聞かせてもらった。

そして再びポーランドを訪れた新緑の季節に、私はクオジンスキ医師を訪問した。その日がスタニスワフの命名日に当たっていた。改めて強制収容所症候群について話をしてもらった。

新しい病気の発見

クラコフは地理的にオシヴェンチム（アウシュビッツ）―ブジェジンカ（ビルケナウ）に近く、解放されて戻ってくる囚人のために応急処置を施すことができる場所だった。距離的な近さばかりでな